

1 目的

近年、国産牛肉において脂肪交雑（霜降り）偏重脱却の動きが注目されている。主な理由は、「飼料費や人件費などのコストが高く、子牛価格も上昇し、肥育農家の収益性が悪化している」ことや「ヘルシーさ」など、新たな価値を構築し、消費者ニーズをとらえる必要性が求められているためである。そこで、農大卒業後、後継者となり地域を担う学生が、黒毛和牛の低コストかつストレスフリーである放牧を行い、その肉質や生産コストを調査し、今後注目される『放牧による牛肉生産』を将来の経営に生かすことを視野に入れて検討した。

2 実施状況

（1）放牧による牛肉生産の実証試験

当農業大学校で放牧による牛肉生産を実施して、①体重の推移、②飼料摂取量、③枝肉成績、④生産コストについて調査検討した。

①②発育について、放牧牛は無理のない飼料摂取量で推移して、増体量も良好であった。

③枝肉成績について、放牧牛は通常肥育に比べると、枝肉重量、ロース芯面積およびバラ厚など、いわゆる肉量では少なかった。また、脂肪交雑（BMS）についてはNo. 2であった。脂肪交雑が低かったが、食味等は特に問題なく概ね好評であった。

④生産コストについて、濃厚飼料の給与量が少ない分、通常肥育に比べて安くなった。飼料費などの経費が安い、その採算性などは詳細に考查する必要がある。



供試牛1(放牧中)



供試牛1の枝肉(バラ肉部分)

（2）先進事例調査

近年、石垣島を中心とする八重山群島において、肉用牛繁殖経営者が「八重山郷里」という銘柄を立ち上げ、繁殖～肥育～食肉卸～エンドユーザーまでの一貫した取組を行い、石垣牛の市場評価を高めつつある。肉用牛肥育経営が厳しさを増す中、草資源の活用や肥育期間の短縮への取組によるコスト低減を早急に行う必要がある。そこで、「八重山郷里」における肉用牛の飼養管理状況や銘柄の確立について現地調査を実施した。事例調査により、学生は、今後需要が増すであろう放牧による牛肉生産への取り組みを理解すると同時に、将来それに取り組む際の実践的なヒントが得られた。



黒島にて(玉代勢牧場)

（3）今後の課題、取り組み

課題としては、放牧牛における子牛生産から牛肉生産までの一貫飼育体系の確立である。また、地域の特性を生かした販売方法も模索する必要がある。